

安野発電所への中国人強制連行

和解を導いた力 Part2

西松建設裁判原告 邵義誠さんの闘いをふりかえる

日 時：2022年10月22日(土)14:00～16:30

会 場：広島弁護士会館 3階ホール（広島市中区上八丁堀 2-73）

参加費：500円

主 催：広島安野・中国人被害者を追悼し歴史事実を継承する会



土居取水口で強制労働の体験を話す邵義誠さん
(2010年10月)

アジア・太平洋戦争の末期、労働力不足を補うために、東条英機内閣が閣議決定して、中国から約4万人の中国人を強制連行し、全国135か所の事業場で重労働に従事させました。その結果、約7,000人が日本で命を落としました。生き残った中国人は、日本敗戦後、何の補償も受けることなく集団で帰国しました。広島では、西松組（現在の西松建設）が360人を安野発電所の建設工事に従事させ、29人が死亡（うち5人は原爆死）し、331人が帰国しました。

安野へ強制連行された中国人のその後の消息は長く明らかになっていませんでしたが、1992年から広島市民と河北大学による日中共同調査が始まりました。93年に被害者2人が半世紀ぶりに来日し、西松建設に対して3項目要求（公式謝罪、追悼碑と記念館建設、しかるべき賠償）を提出して補償交渉を開始しました。しかし西松建設が責任を認めなかったため、5人が原告となって西松建設を広島地裁に提訴しました。

邵義誠さんは正義と公道を取り戻すために原告として裁判を闘い、最高裁で敗訴しましたが、2009年に和解が実現しました。

「強制労働の現場が日本のどこか、当時は知りませんでした。毎日12時間、収容所前の川の中で石を取り除く仕事をさせられました。1944年12月、私は疥癬という伝染病にかかり寝たきりになりました。体中が化膿して腐っていくようでしたが、治療してもらえず放置され、食べ物は半分に減らされました。45年3月、突然、働けない者が集められて中国に帰されました」

和解成立後、邵義誠さんは西松安野友好基金の運営委員として和解事業に力を注ぎ、2018年に92歳で亡くなりました。

本集会では、こうした邵義誠さんの闘いの軌跡を、映像や証言を交えながら、さまざまな角度からふりかえます。今年もコロナ禍のために中国から遺族をお招きすることができませんが、天津市在住の長女・邵莉娜さんとその夫・張振倫さんのお二人と会場をリモートでつないで、お話を聞く予定にしています。ふるってご参加ください。

なお、新型コロナウイルスの感染状況によって緊急事態宣言が出た場合は、集会は中止いたします。ホームページでお知らせいたしますので、ご確認ください。

<プログラム>

第1部 ニュース映像で見る邵義誠さん

第2部 遺族が語る邵義誠さん

長女・邵莉娜さん夫妻とリモートで
つながります

第3部 邵義誠さんを語る

内田雅敏さん（弁護士）ほか

邵義誠さんの軌跡



西松建設を提訴。弁護団・支援者とともに広島地裁へ
(1998年1月)



西松建設裁判を支援する会結成集会で決意を表明する
(1998年1月、広島市西区民文化センター)



53年ぶりに安野発電所を再訪し、日本で死亡した
仲間を追悼する(1998年1月、光石掘出し口)



広島高裁判決。亡くなった原告の遺影を胸に
弁護団・支援者とともに入廷する(2004年7月)



1944年に拉致された場所を確認する調査を行なう
(2002年10月、山東省青島市大港駅前)



和解成立から1年、
「安野 中国人受難
之碑」除幕式で西松
建設代理人弁護士
と笑顔で握手する
(2010年10月)



2013年2月の春節、自宅でくつろぐ
邵義誠さん一家。邵義誠さん夫妻と、
長女・邵莉娜さんと夫の張振倫さん。
張振倫さんは、邵義誠さんが西松建設
に対して謝罪と補償を求めた闘いを支
え続けました。和解成立後は、生存者・
遺族を探し出す調査を行なったほか、
邵義誠さんが十分に活動できなくなっ
てからは基金運営委員代理として和解
事業に取り組みました。



【連絡先】 広島安野・中国人被害者を追悼し歴史事実を継承する会

《電話》 080-3880-8340 《Eメール》 ykkwhr@pony.ocn.ne.jp 《ホームページ》 <https://keishousurukai.com/>